

大学体育会部活動における権力構造: 男性集団 の権威と実力主義に着目して

清水千夏

本研究の目的は、体育会部活動の権力構造と男子学生の序列について明らかにすることにある。本論では先行研究の知見に基づき、部活動における権力に、年功序列、セクシュアリティ、実力などの要素が関係すると仮定する。そして、それらが構造の中でどのように作用し合っているのかを検討し、それぞれの権力がどのようにして支えられ、組織の権力構造を保っているのか、あるいは構造を変容させているのかを明らかにする。

また、体育会部活動の男性性についても検討する。本研究における事例調査を通じて明らかになった、部活動内での男性コーチ・男子部員による特定の部員に対する抑圧という不祥事の内容を中心として、その過程を明らかにし、さらに大学教職員であるコーチ陣が行った対処について分析を行う。

具体的な調査としては、X 大学において半構造化インタビューを実施した。調査は、研究目的に関連するデータが得られた陸上競技部を分析対象とした。また、男性性との関連を図るため、本研究では対象を男子選手に限定した。対象種目を個人競技である陸上競技に限定したのは、記録で競技力を明確に測ることができるためである。調査対象とした X 大学陸上競技部は、男子選手が多く、「男の色が強い」とされていた。また、部活動の特徴として、伝統的に「学歌試験」というものが存在しており、主に 1 年生に上下関係を叩き込むために実施されるとされ、多くの新入部員にとってつらい経験でもある。1 年生が苦しんでいる姿を見ることができるため、学歌試験を楽しみにしている上級生もいる一方で、これに批判的な上級生もいるなど、評価は分かれている。また、X 大学の特徴として、男子部員が多いことの他に、お互いの仲の良さも語られた。

インタビュー調査の分析については、はじめに、部活動内の権力と不祥事の実例を整理した。X 大学陸上競技部では、年功序列と実力主義による権力が確認でき、男性集団の序列もこれらの権力と関係するものであった。年功序列について、学年による上下関係がみられ、学歌試験の実施によって厳しい上下関係が構築される一方で、インカレの時期が終わると上下関係が緩くなり、部の

特徴である「仲の良さ」が表れていた。毎年継続して学歌試験による支配が行われているが、近年は上級生の権威が弱体化しており、後輩の服従は絶対的なものではなく、一時的なものになっているということが確認できた。

また本調査で、複数の調査協力者が競技記録と権力に関する語りをしたことや、選手が「記録を盾にする」という出来事を語っていたことから、実力主義から生じる権威があることを確認することができた。実力主義のもとでは、優れた記録を持つ選手が有利になりやすいことが確認できた。加えて、実力主義による権力は、年功序列のシステムを覆すものではなく、そのシステム内で発生するものでもあった。

また、X 大学の不祥事とそれに対する部員の語りもまとめた。不祥事は、SS ブロック(100m・200m 種目の選手の集まり)の中で起きていた。SS ブロック内で、SS のコーチが、部員である A を“いじり”、コーチに続いて A と同学年の競技力の高い選手も A をいじるようになった。いじりの内容が悪化し、いじめにつながったというのが、X 大学で起きた不祥事である。いじめに加担した学生は、謹慎処分となった。

これらの分析をもとに、体育会部活動組織の整理と不祥事が起こるまでの過程、実力主義に関する考察を行った。X 大学の事例からは、体育会部活動組織というものが“ムラ”を基盤として成立しており、部の目的より、戦績を重要視していたこと、組織の基盤自体は、これまで研究されてきた部活動の構造と比較して大きな変化はないものの、組織内の成員と権力の関係には変化がみられることが明らかになった。

実力主義に関して、X 大学では実力主義を教職員を中心とした組織の上層が重視し、謹慎中の学生が大会に出場することを許したことで、競技成績がよければ不祥事が見逃されるという前例を作ったといえる。本事例で明らかになった実力主義とは時に相対的なものでもあり、組織のより上位にあるコーチ陣などの判断や権力によって左右される側面を持つものでもあった。また、先行研究で指摘されたような、実力がない選手が相対的な剥奪感や嫉妬から下級生を抑圧するのではなく、実力を持つ選手が、その権力から部員を抑圧していたという本研究の事例からは、年功よりもむしろ実力主義が重視されていると同時に、それに対する内なる批判の存在や、それを踏まえてなお“実力”のある選手を温存するというより上位の権力との関係を含めた両義性をも示すものといえる。

最後に、本研究の残された課題として、男性を中心とした大学部活動とジェンダー秩序の関連に対する分析が挙げられる。また、本研究では X 大学の事例のみを扱ったため、他大学の事例では、部活動組織の体質や権力構造に関する結果が異なる可能性もある。実際にある調査協力者は、インタビューにおいて、他校ではより上下関係が厳しい部活動があると聞いた、とも語っていた。今後、大学体育会部活動組織の体制や権力構造を広範に詳らかにし、体育会部活動の問題をより明確にしていくためには、さらに多くの事例による検証が求められるといえる。